

「看護に活かすホリスティックアプローチ」 ～大震災においてアプローチの意味するところ～

講師：荒川唱子（福島県立医科大学看護学部教授）

略歴：

神奈川県立衛生短期大学看護学科卒業後、内科 / 外科系病棟で臨床経験を積む一方、明治学院大学社会学部卒業、熊本大学教育学部看護教員養成課程に助手として勤務。1987 年渡米、米国カソリック大学看護学部修士課程修了、1995 年同大学博士課程修了（看護学博士）、1996 年福島県立医科大学助教授、1998 年看護学部教授、現在に至る。

要旨：

2011 年 3 月 11 日 14 時 16 分、マグニチュード 9.0 の大地震・津波に東日本が一気に飲み込まれ、福島原発事故も発生して収束の目処が立たず人々を恐怖と不安に陥れている。大地震発生当時、筆者は建物の 5 階にいたが、その時の恐れとこの先の不安とが頭の中を回っていた。やがてグラウンドに出たが、建物の揺れを目の当たりにして恐怖におののいた。雪もちらつき寒い夕方、看護学部棟に入ると TV が放映されていたが、それは大津波に飲まれて一掃されてしまうなまなましい光景であった。

多くの方々が尊い命を奪われ行方不明者も相当おられる。命からがら家族や友人・知人たちを求めて探し歩く姿が痛ましい。病人の看病をしながら自分のケアもしなければならない。自らも負傷しながら他者の世話も買って出る位の心意気が求められるような世界であった。あれ以来 4 ヶ月余りが過ぎた。原発事故を起こした福島の状況は放射能という目に見えない恐ろしいものの発生により地域住民は避難を余儀なくされ、先の見通しさえ全くつかない不安定な状況に追い込まれている。職を失い家をなくし田畑を流され家族もばらばらな状態だ。このような状況においてホリスティックアプローチが本当に求められているのではないだろうか。それは発生していることを全て包含した上で何が必要かを判断して対応するのである。そこには全て繋がりの世界があるように思える。人と人の繋がり、その輪はどんどん大きくなる。人と組織、組織と組織、組織と県や国、国と国、はては宇宙まで繋がり、その輪は広がっていくように思う。

人間と環境との繋がりを考えると、どこまでもオープンなのである。被災地の人々の QOL の向上を考え支え続けるとの姿勢のもと関わり続けることが筆者はホリスティックアプローチであると考えている。そこには「絆」という言葉が示すように人と人の関わりが土台となり個から大きな集団へと際限なく広がっていく世界なのだ。